慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	周偉嘉君学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1997
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.70, No.3 (1997. 3) ,p.135- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19970328-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特別記事

周偉嘉君学位請求論文審査報告

周偉嘉君提出の博士学位請求論文「中国第三党の研究」の構成は、以下の通りである。

序　章　中国第三党研究の分析視点
第一章　第一次国共合作分裂後の第三党と中共
第二章　第一次国共合作分裂後の第三党と国民党改組派
第三章　福建省における初期第三党の発展
第四章　第三党形成初期における章伯鈞
第五章　福建事変における第三党の役割
第六章　第三党と福建人民革命政府内の党派関係
第七章　結　論

二〇世紀前半の中国革命が中国国民党と中国共産党との対立に収斂したために、両党の中間に存在した第三勢力に関する研究はこれまで十分に行われてこなかった。たとえあったとしても、第三勢力の果たした役割を国民党ないしは共産党の立場から評価する研究が大部分を占めており、第三勢力そのものを分析した研究は少なかった。

第三党は、第三勢力のなかでもっとも重要な政治集団の一つであり、その名称の示すごとく、国民党と共産党とのあいだに存在した中間勢力である。しかし、第三党が自らをそのような名称で呼んだことはない。第三党が最初に「中華革命党」という政党として現れたのは、一九二七年七月に国共合作が分裂した後の二八年春のことであった。そこに参加したのは、中共からの離脱者と一部の国民党左派の人々であった。この中華革命党は一九二九年後半に崩壊し、一九三〇年八月に鄧演達の指導下に「中国国民党臨時行動委員会」が結成された。しかし、国民党による鄧演達の逮捕・処刑に続き同委員会は再び分裂した。臨時行動委員会は一九三五年一一月黄琪翔の主導下に「中華民族解放行動委員会」となり、一九四七年に「中国農工民主党」と改名し、今日中華人民共和国で民主諸党派の一つとして存在している。中国政党史においてこれら一連の政党が「第三党」と総称されており、周偉嘉君もこの呼称を採用している。本論文の主要な分析対象は、第三党がもっとも活躍した一九二〇年代後半から一九三〇年代前半までの時

期である。

序章において周偉嘉君は、「第三党とは第一次国共合作分裂後、中国国民党と中国共産党に対抗して生まれた、第三の道を唱える中間勢力である」と定義づけることによって、この研究の基本的視点を提示している。すでに示唆したように、第三党の体系的研究が欠如しているが故に、その全体像を解明するためには事実の確定が研究の重要な一部を構成する。

したがって、序章で示された周君の分析視角は、この事実の確定と密接に関連している。第一の視角は、第三党の思想的起源を譚平山のコミンテルン第七回執行委員会拡大会議（一九二六年一一月）における発言に求めている。この問題は第一章で詳細に分析されるが、周君独自の見解であり、第三党の全体の性格を考える上で重要である。第二の視角は、離合集散を繰り返す第三党の運動を整理し、鄧演達、譚平山、章伯鈞の三人の指導者を中心にしてこの運動を再構成しようとしていることである。第三の視角は、第三党の運動を他の政党政派との関連で捉えることである。これは、国民党や共産党の立場からではなく、第三党独自の立場を解明しようとする、本論文全体にわたる周君の基本的視点を示すものである。

第一章は、相互に関連した二つの問題を扱っている。第三党の思想的起源とその中共との関係である。

第三党の起源については、これまで一九二七年七月の武漢政府の崩壊直前に求める見解が支配的であったが、周偉嘉君は第一次国共合作時期の多くの中共の文書を検討することを通して、一九二六年の譚平山の発言のなかに求めている。譚平山自身はいまだ共産党員であったが、国共合作の危機のなかで国共両党から独立した第三党の組織を中共のなかで主張していた。それ故に、やがて彼は一九二七年一一月に中共を除名された。国共分裂に際し国民党左派に属する鄧演達らも、国共合作の崩壊過程を通して両党に失望と不信感を抱き、第三党の組織を主張するに至った。一九二八年春これら二つの集団が合流して中華革命党が結成された。すでに指摘したところであるが、周君による中華革命党結成に至る事実解明の努力は高く評価されてよい。

このような第三党結成および鄧演達帰国後の中国国民党臨時行動委員会への改組は、中共との対立を内包するものであった。周偉嘉君の主要な関心は、第三党と中共との理論的対立の解明にあった。第三党は平民革命を提唱した。それは、労働者、農民を基礎としつつも、中間勢力としての小ブルジョアジーの革命における積極的役割を評価する

ものであった。そのことは、中間派を排除した当時の中共の政治路線に対抗する意味を持っていたのである。中間勢力評価の問題は、第三党と中共だけの問題ではなく、当時の革命運動が直面していた共通の課題であった。したがって、周君は中共との対立の問題を扱いながら、より広い背景のなかで第三党を評価しようとしていることになる。

いまひとつ注目すべき点は、第三党の政策のなかで生産力の発展の重視、制限された私有制、民族工業・農業の奨励などの要素を抽出していることである。周君が、これらの要素と中共の新民主主義論、一九五〇年代前半の国家資本主義の政策、今日の改革・開放路線のなかに共通点を見出すことによって、第三党の政策の現代的意義を検証しようとしていることは評価されてよい。

第二章で取り上げる国民党改組派とは、かつての国民党左派と一部の共産党からの脱党者によって一九二八年冬に上海で結成された「中国国民党改組同志会」の人々を指す。それは、武漢政府時期の共産党に反対するとともに、蔣介石の下で中央集権化した国民党にも反対した中間勢力であった。その限りにおいて、改組派は第三党の立場に類似した存在であった。

周偉嘉君が本章で取り上げた第一の問題は、改組派結成の前段階として、武漢政府時代の鄧演達と汪精衛の人脈を検討し、土地問題、労農運動の急進化をめぐる第三党と改組派との政策・路線上の対立を明らかにしていることである。

第二の問題は、第三党と改組派との対立を取り上げていることである。しかし、周君は中華革命党と改組派との論戦を、「新たな理論的展開を示すというよりも、むしろ批判に対する反批判という形で展開されたものであった」と結論づけている。また、臨時行動委員会は、「革命的手段で旧社会の秩序を破壊し、平民政権を樹立するという点において」改組派とは異なり、一九三〇年に改組派が参加した反蔣戦争のなかで樹立された「北方政府」の失敗を改組派運動の歴史的失敗と評価していた。

このように見る限り、第三党と改組派とのあいだに基本的な理論上の相違はない。両者が中間勢力としてのブルジョアジーの積極的役割を評価し、蔣介石の国民党と中共に反対する中間勢力であるが故に、これは当然の結論であった。但し、ここで周君が第三党の政策が改組派との対抗関係のなかで形成された点を指摘していることは、政党間の相互作用のなかで各党の運動を捉えようとする中国政党史研究の新しい方向を示している。

福建省は第三党のもっとも重要な拠点であり、それ故に南京国民政府に対抗するための第三党と中共との勢力争いの場でもあった。第三章は、中共閩西根拠地（福建省西部）で発生した「社会民主党を粛清する事件」（閩西粛清）を扱ったものである。

閩西粛清事件とは、中共閩西根拠地で活動していた第三党党員に対して、一九三一年一月から三二年三月までに中共によって行われた粛清である。周偉嘉君は、このような事件に至る背景として、まず国共合作分裂後の中共の第三党評価の変遷を跡づけている。ここでは分析の詳細を省略し、「第三党に対する中共の認識は、みずからの政策転換とコミンテルンの影響を受けて、第三党を反革命の政党と見なすようにな」ったという周君の結論を示しておく。続いて福建省における第三党の活動が明らかにされ、一九三〇年には福建省本部の党員数が二〇〇〇人に達していたと言われる。そして、このような情況のなかで福建省西部で発生した第三党と中共との衝突の事実が解明される。

従来この事件についてほとんど研究が行われてこなかった。その意味で、本章において第三党研究の一環として事件の概要が解明されたことは、この時期の政治史研究への重要な貢献である。さらに、この事件の研究の副産物として、「社会民主党」の実態が明らかにされた。つまり、周君は多くの資料を検討した結果として「社会民主党」とは第三党であったと結論づける。それは、第三党がプロレタリア独裁に反対し、議会制民主主義を通しての社会主義の実現を主張した第二インターの路線をとっていると評価する中共によって与えられた呼称にすぎなかったのである。

第四章は、第三党形成過程における章伯鈞（一八九五～一九六九）の役割を検証しようとするものである。章伯鈞については、彼が国共両党に反対したという政治的理由とあまり多く著作を残さなかったという理由から、中国では研究が十分に行われてこなかった。したがって、本章では章伯鈞の伝記的叙述に多くの紙幅が割かれている。

周偉嘉君は、章伯鈞が中華革命党、臨時行動委員会へ参加した政治活動を跡づけながら、元共産党員である章を中共と第三党との橋渡し的地位に位置づけている。この立場は、彼の理論的立場にも反映されていた、というのが周君の分析である。つまり章伯鈞は、鄧演達、譚平山が平民革命論において中間階級としてのブルジョアジーの役割を相対的に高く評価したのに対し、中間階級の役割を低く評価していたのである。周君はこの点において章が当時の中間勢力を排した中共の急進的路線に近かったと判断している。

このことは、来るべき福建人民革命政府事変における章伯鈞の役割を示唆しているのである。

福建事変とは、一九三三年一月二〇日、国民革命軍第一九路軍内の李済深らの反蔣派と第三党、神州国光社、国家主義派などの第三勢力が連合して、福州に「中華共和国人民革命政府」を樹立したが、一九三四年一月一五日に崩壊した事件を指す。

福建事変において第三党は重要な役割を果たした。第五章はこの問題を扱っている。ここで分析されているのは、事変発生の過程における第三党と第一九路軍ならびに中共との関係である。周偉嘉君が明らかにしたことは、臨時行動委員会の指導者・黄琪翔と第一九路軍の指導者・蔡廷鍇との個人的接近の過程、ならびに「反蔣抗日」の路線上における第三党と第一九路軍との合作の過程である。本章で明らかにされたいまひとつの事実は、事変発生につながる第一九路軍と中共との接近の過程において、第三党、特に第四章で取り上げた章伯鈞が重要な役割を果たしていたことであった。以上において、周君は福建事変発生に至る過程で第三党の果たした役割を明らかにすることに成功している。

第六章は、福建人民革命政府に参加した諸党派と第三党との関係を分析している。そもそもこの政府には、国民革命軍第一九路軍の一部の軍人、第三党、神州国光社、国家主義派の人々が参加した。

まず取り上げられるのは、国家主義派と神州国光社の政府への参加である。国家主義派（中国青年党、以前の独立青年党）の一部が対日抗戦と国民党独裁に反対して福建人民革命政府に参加したが、主要な指導部は第三党ならびに政府に対する不信から参加には消極的であった。

第三党と神州国光社との関係はより複雑であった。神州国光社の歴史は一九〇一年まで遡るが、ここでは王礼錫、胡秋原らを中心として、一九三一年に発行された『読書雑誌』誌上における中国社会史論戦に参加した左翼知識人の集団であった。彼らは必ずしも政党としての組織を有していなかったが、第一九路軍系の陳銘枢の支援を受けて人民革命政府に参加していた。しかるに、陳銘枢らの神州国光社の人々は人民革命政府における第三党の活動に警戒心を抱き、第三党を解散させて一九三三年一月に生産人民党を発足させた。「生産人民党の設立は各党派の解消を前提としていたが、その狙いの一つは第三党を吸収し、結合することにあった」のである。

しかし、このような統合にもかかわらず、生産人民党内

部における第三党と神州国光社との対立が福建人民革命政府の下で存続した。周偉嘉君は、このような観点から政府内における両者の力関係ならびに路線上の対立を分析している。同君によって指摘された主要な対立点は二つある。人民革命政府は、土地政策として「計口授田」を掲げた。それは、「各郷の人口数と耕地面積を詳しく調査し、その生産量を見積もり、一人一人の田地の生産量を定め、田地を授ける」というものであった。この政策の実施にあたり、第三党が政府による土地の没収という急進的方法を主張したのに対し、神州国光社の人々はそれに反対した。いま一つの対立点は、国家建設構想にあった。つまり、第三党は労農政権を中心として、国家資本主義から社会主義への二段階革命論を採っていたのに対し、神州国光社の人々はソ連型の社会主義を否定し、階級闘争や私有財産の廃止に反対した。周君は、これを「資本主義」への道であると結論づけている。かかる路線上の対立は福建人民革命政府内部における党派間の対立と並行しており、そのことがこの政府の崩壊をもたらす重要な要因であった。このように人民政府内部の党派的対立を路線と権力の側面から体系的に解明したのは本論文が最初のものであり、高く評価されてよい。

第七章の結論は、本論文の分析を基礎にした周偉嘉君の第三党論である。同君は、第三党の追求した理念と目標を次の四点にまとめている。(1)それは、封建主義と帝国主義に反対して平民革命を提唱した。孫文の三民主義を継承しつつ、社会主義を目指した。その点で中共の新民主主義論に近かったが、プロレタリアートの指導権を否定したことにおいて中共とは異なっていた。(2)平民政権は、西側の三権分立、孫文の五権分立と「以党治国」、中共のプロレタリア独裁を拒否した。それは、社会民主主義理論を基礎とした「一八七一年のパリ・コミューンの立法・行政を統合した人民代表制に近い」ものであった。(3)土地革命を二段階に区分し、第一段階では耕作者に土地を与え、第二段階で土地の国有を目指した。しかし、階級闘争による土地没収政策を採らなかった点で中共と異なっていた。(4)社会主義への移行の過渡期として国家資本主義段階を重視したことである。

しかし、周君も指摘するように、「第三党運動は必ずしも強力なものではな」かった。(1)独自の軍隊と根拠地を欠いていたこと、(2)労働者、農民を中心とする全国的規模の大衆的基盤を欠いていたこと、(3)第三党を統合していくイデオロギーを作り出せなかったことなどがその理由である。

それにもかかわらず、周君は第三党が提唱した理念と運動が一九二〇～三〇年代の国民革命、中国民主同盟の結成、国共内戦から中華人民共和国の時期において一定の役割を果たしてきたことを評価している。本論文の分析結果を前提として、結論で示されたこのような評価は非常に適切であるといえる。

以上において、本論文の各章の概要を紹介しながら、それぞれについて論評を加えてきた。いま一度要約すれば、本論文の優れた点は以下のようになる。

(1) これまであまり研究の行われなかった第三党を取り上げ、体系的に研究するとともに、その果たした積極的役割を明らかにしたこと。

(2) そのために日本と中国における資料を探索・発掘し、第三党に関する多くの基本的事実を明らかにし、確定したこと。

(3) これまでの国民党ないしは共産党の立場からの評価に代わって、第三党それ自体を分析し、二〇世紀の中国政党史のなかで適切に位置づけていること。

(4) 本論文の多くの部分は、すでに『法学政治学論究』、『東洋学報』、『東洋文庫近代中国研究彙報』などの学術雑誌に発表され、評価をえていること。

以上の点を踏まえて、本論文は二〇世紀中国政党史に対する創造的貢献であるということができる。最後に、周偉嘉君の研究の今後の発展を願って、抗日戦争時期から中華人民共和国時期に至る間の第三党、さらには第三勢力全体の分析に踏み込むことを要望しておきたい。

以上の報告に基づいて、審査員一同は周偉嘉君の業績に対し博士（法学、慶應義塾大学）を授与するに足ると判断する。

一九九六年六月二〇日

主査　慶應義塾大学法学部教授　山田　辰雄
副査　法学研究科委員法学博士　慶應義塾大学法学部教授　小田　英郎
副査　法学研究科委員法学博士　慶應義塾大学法学部教授　国分　良成